

元日本軍兵士のライフストーリー、韓国人研究者によるアクティブ・インタビューを中心に

文学研究科 人間行動学専攻 朴洸弘 (PARK GWANG-HONG)

研究の概要

- アジア・太平洋戦争の終結時、軍人として出征した元将兵のうち、存命者の年齢は九十歳代半ばから百歳代。日本軍に所属して戦争に行った当事者から、直接に戦争体験の語りを書く機会も希少となっている。現時点が、軍人として戦争に向けた、実際の体験者の語りを直接聴ける最後の機会。
- 本研究では、旧日本軍に所属して出征していた存命者を対象にしてインタビューデータを中心に、国体論に基づく国民意識や対敵観の形成と変容、その観念が戦時期や戦後の生活、さらに、戦死や戦争そのものへの意味付けにおいてどのように作用したのかに着目したい。
- 特に、1980年代以降、日本とアジア諸国の関係が新しく設定される中で想起された、日本人以外の戦没者（場合によっては、日本による被害者）の存在は、日本社会における戦死や戦争への既存の意味付けに亀裂を引き起こすもので、かつて日本軍に属して戦争を体験したインタビューがその存在に向き合う様相は、歴史をめぐる東アジア次元の総理解を模索する上で示唆するところがあるかと期待。

韓国人の研究者が元日本軍人をインタビューする意味

- 本研究は、インタビューにおける実証主義と客観主義と距離をおき、インタビューという行為自体が調査者と語り手の相互行為の結果であるという「アクティブ・インタビュー」論の立場に立つ。
- インタビュー調査の「伝統的なアプローチ」で、語り手は「受動的な回答の容器」としてみなされてきた。
- これに反して、回答に至るまで調査者と語り手の間で行われる意味構築の過程に着目する試みも。つまり、インタビューの内容は、単に「回答の容器」から産出するものでなく、調査者と語り手の相互行為の中で構築される共同作業の結果である、という観点がアクティブ・インタビュー論。
- 本研究では、語り手の戦争体験そのものだけでなく、筆者と語り手の中での相互行為による意味構築の過程に着目したい。



研究経過

- 国体論の教育理念に基づく学校教育、自ら国に殉じることを覚悟した戦争体験を経て、日本人の戦没者の死は「殉国」と位置づけられる。一方で、「英霊」の「殉国」戦後の日本で達成された（すべき）繁栄の基礎であるという観点から、「殉国」と「平和」の結合意識が形成
- 「殉国」と「平和」の結合意識は、大日本帝国の暴力によって被害を受けた側からすると、受容困難。それゆえに、「殉国」と「平和」を二項対立的な概念として捉える先行研究も。（例：赤澤史朗）
- 「殉国」と「平和」の二項対立的図式を乗り越えて、相互理解の可能性を模索したいという問題意識。韓国人の聞き手と、元日本軍人である語り手の間で生じる「居心地の悪さ」に注目し、その場面で構築される、「殉国」と「平和」、「戦争」、「帝国」、「加害」と「被害」などへの新しい意味について論説。
- 戦友たちの死を偲ぶ脈絡から、戦争体験を振り返っていた語り手が、大日本帝国による被害者といわれる側の立場を意識することで、現れる語り手の変化
- 会話を通じて、聞き手としても、韓国の教育課程では考えられる機会が殆どなかったこと（アメリカや西欧列強の侵略問題）について意識

朴洸弘、2024、「「帝国責任」をめぐる元日本軍兵士のライフストーリー——元韓国軍兵士によるアクティブ・インタビューを通じた相互理解の可能性」『日本オーラル・ヒストリー研究 第20号』日本オーラル・ヒストリー学会

今後の課題

- インタビューの現場における場面だけの変身から、存在・生き方の変身に発展させる道筋の研究は今後の課題。
- 元軍人だけでなく、民間人を含む戦争体験者一般に拡大すれば、対話的構築のプロセスに着目した研究は数多くあり、こうした知見を本研究の知見と合わせて検討していく作業が必要。
- 語り手と調査者が両方とも男性であるため看過されるジェンダーの問題に関する考察
- 戦争を实际体験した当事者がなくなっている時代状況。次世代への戦争体験の継承は、アクティブ・インタビューからどのように検討すべきか。